



松尾文夫 著

(岩波書店) 3000円＋税

『アメリカと中国』



1784年2月22日、ニューヨークを出航した商船「中国皇后号」が中国の広東に到達し、貿易ルートの開かれて以来、230年余にわたる米中のしたたかな「共生」の軌跡。今年度の日本記者クラブ賞を受けたベテランジャーナリストが、14年にわたる現地リサーチと文献渉猟をまとめた大作。興味津々で読み始め、その雄渾な構想、スリリングな展開、重厚な中身、該博な知識に圧倒された。思わず人に吹聴したくなる、知らなかった事実が続々出てくる。

例えば儒教が欧州経由で大西洋を渡り、1737年にベンジャミン・フランクリン経営の週刊誌で「孔子の教え」が初紹介されたこと。ワシントンの最高裁判所の切妻に、世界3賢人の1人として孔子像が掲げられていること。ポルテール翻案の戯曲「趙氏孤児」が1755年にパリで初演されて大当たりし、ニューヨークとフィラデルフィアでも上演されたこと(評者はこの物語を宮城谷昌光の小説「孟夏の太陽」と陳凱歌監督の映画「運命の子」でやっと知った。後者は大胆な脚色)。

林則徐によるアヘン廃棄処理に宣教師らアメリカ人3人が立ち会い、林則徐とも会見したこと。しかし、アメリカも実はアヘン貿易に深く関わっていたこと。アジア人初のエール大学卒業生、容閔が太平天国にも一時肩入れしたこ

と。容閔は駐米副公使として清朝留学生事業に当たったものの挫折したこと。中国派遣の宣教師によるアメリカ紹介が中国の「海国図志」に盛り込まれ、それが幕末日本でベストセラーとなつて維新革命に火を付けたこと。

まだまだあるが、それは読んでのお楽しみとして、著者が強調するのは中国とアメリカの交流が日米よりずっと早く始まり、ずっと深く続いたことだ。容閔の「留美学童」プロジェクトは6年で中断したが、その後1909年、アメリカが義和団事件の賠償金を返還する条件として米留学予備校が北京に設立された。これが現在の清華大学となる。中国人は昔も今もアメリカが大好きだが、それも不思議ではない。「親米派」づくりのシステムが100年以上前につくられていたのだ。

本書はアメリカが中国に独特の親近感と好意を寄せ、中国も他の西欧列強とは区別してアメリカに「敬意」を抱いたことを、さまざまな文献や歴史的事実で明らかにしていく。毛沢東も例外ではない。「中国の赤い星」で知られるジャーナリスト、エドガー・スノーと米思想家ジョン・デューイとの接点を通じて、毛沢東とアメリカの意外な近さが浮き彫りにされる。「中国のエール協会」が湖南省長沙に開いた病院内に、毛沢東の書店「文化書社」があり、棚には

中国語訳のデューイ著作が並んでいた。さらに、デューイが参加した湖南での1920年のシンポジウムでは毛沢東が書記を務めた。若き毛沢東は明らかにデューイのプラグマティズムの影響を受け、青年期には「アメリカに一種の『桃源郷』を見ていた」という。

毛沢東とアメリカの「赤い糸」と対比して、蒋介石とアメリカの「距離」を描き出す手法は鮮やかだ。著者によると、「中国皇后号」の米中交流スタート地点から一貫して、アメリカは中国に対して「二つの顔」を使い分けてきた。建前と本音、理想主義と現実主義の巧みな共存であり、二枚腰の外交である。現実主義に徹した場合「国益のエゴをむき出しにした『変身』が平気で行われる」。蒋介石が見捨てられたのがまさにそのケース。終章で、そもそも「門戸開放」政策は「結果としては中国に対する静かな、しかし極めて残酷な『裏切り』の路線であった」として、その裏切りの数々を筆鋒鋭く列挙している。

本書が扱うのはほぼ1945年まで。注目されるトランプ政権下の米中関係の行方について詳述はないが、エピソードで松尾氏は「中国皇后号」との「貿易で始まった」米中の共生の歴史がしっかりと継承されていると指摘。米中の「切っても切れない」経済的相互依存に着目すべきだと説く。米中という特殊な関係の源流を探り、その本質を読み解く本書は、日本にとっても貴重な示唆に満ちている。アメリカと中国が21世紀の世界を形づくることは疑いなく、日本はそのなかに生きていくのか、知恵を絞らねばならないのだから。

(服部 健司) 時事総合研究所代表取締役